

東京経済大学報

2010年

新春号

第42巻第3号

十一
×÷

TOKYO
TOP30
計画

創立110周年、次の10年へ。

足りないものを足し算します ムダについては引き算します
新しい考え方を掛け算します みんなの目線で割り算します



新図書館メディアタワー

激動の二〇一〇年をむかえて

新年明けましておめでとうございます。皆さまはこれまでの本学へのご協力にお礼申しあげ、本年も皆様にとって幸多い年であることを祈念いたします。

昨年は国内外ともに大きな変化がみられる一方、以前からの厳しい状況も相変わらず続いております。本年はこうした状況の好転を願うとともに、状況を自主的に切り開いていくことがより求められるようになってきました。米国で

はオバマ大統領が、日本では民主党政権が誕生して政治的な新風が巻き起こるなかで、地球環境保護など新たな取り組みも期待されるようになりしました。しかし一昨年秋のリーマンショックを機とする経済的不況は変わることなく続き、学生諸君は現在も厳しい就職環境のもとに奮闘しております。また日本社会の少子高齢化の基調は変わることなく、十八歳人口の減少が大学にますます深刻な影響を及ぼしております。たとえば昨年は約五割の四年制大学、約七割の短期大学が定員割れを起こすなど厳しさが増しており、本年もその趨勢が続くものと予測されます。

厳しい環境をむしる改革の好機へ

大学を取り巻く環境が厳しさを増すなかで、本学はこのような状況をむしる大学改革の好機と受けとめる積極的な姿勢を一昨年度の事業計画のなかで表明しました。本年もそうした姿勢を堅持することが必要だと思えます。大学の社会的使命は教育研究を通じて有為な人材と有益な研究成果を社会に送り出すことにありますが、それを可能にする学内環境を整備し、経営基盤を強固にすることもま



た不可欠な課題です。すでに国分寺キャンパス整備は緒に付いており、順調に進めば再来年には新教室棟、そのすぐ後には新図書館ができ、教育研究環境はさらによくになります。

こうしたなかで、本学は本年、創立百十周年を迎えます。この記念すべきときに、改めて本学の建学の精神、理念を再確認し、これまでの改革の歩みを振り返り、将来にむけての展望をより明らかにすることが求められています。

厳しい状況をむしる大学改革の好機と受けとめるという積極的な姿勢こそ、じつは本学の理念である「進一層」の真髄であります。同世代の半数以上が大学へ進学する大学ユニバーサル化の時代を迎え、また教育における国境の壁が急速に低くなりつつあるグローバル化の進展のもとで、いやおうなく教育の質保証と国際的通用性がすべての大学に求められています。それは現在の文教政策論議がそのことをめぐるってなされていることから明らかです。同時にまた、そのなかにあつて個々の大学の独自性、とくに

私立大学においては、建学の精神とかかわる大学の個性や特徴を発揮することがとりわけ大切なことです。この点について、本学の「実践的

な知力」「グローバル社会で活躍」という理念はとくに重要な位置を占めており、その一層の発展と具体化をはかることが現在求められています。

実学と国際化の理念をさらなる具体化へ

今から三年前、「TKUチャレンジシステム」がスタートしましたが、ここでは大学ユニバーサル化への対応の一方で、この二つの理念の具体化がはかられ、徐々に成果をあげてきております。現在はその経験を踏まえながらより大胆な構想を打ち出すことが可能であり、また必要になってきております。その構想の過程では、学部・大学院における従来の編成のあり方なども検討の俎上にのせ、新たな可能性を追求することも可能だと思われまます。こうした議論のなかでしばしば教育における教養と専門の関わりと比重などが問われますが、ともに不可欠なものと考えるべきでしょう。

「グローバル社会で活躍」の理念については、たとえば世界経済の変動、とりわけ東・南アジアなどの急速な台頭への対応が不可欠です。十

年前の本学創立百周年に際して「国家・民族の境を越えて、大学と企業など外部世界との壁を越えて、家計状況や年齢的差異を越えて、より一層の開かれた大学を目指さねばならない」との問題提起がなされました。この「社会に開かれた大学」もまた本学の重要な理念の一つです。そうした改革への努力のもとで、経営基盤をよりいっそう強固にするために、五年前の事業計画で提起された学生数七千人規模の確保という目標も実りある現実的なものになります。民主党政権下での文教政策と文教予算のあり方、多くの大学における大胆な改革の動向に注意を払いながら、本学独自の発展を模索すべきだと思えます。さらなる本学の発展をはかるべくこうしたことに取り組み、そのなかで久木田学長が提起している「TOKYO TOP30」を進めていくことが、創立百十周年を迎えるにあたってまことにふさわしいことだと思えます。

最後に、卒業生の皆さまをはじめ関係者の皆さまに、本学への変わらぬご鞭撻、ご協力をお願いし、新年のご挨拶とさせていただきます。

新春ごあいさつ

創立百十周年を契機に新たな東京経済大学へ
「TOKYO TOP30」を目指して

学長 久木田 重和

新年明けましておめでとうございます。皆さまから旧年中に賜りました温かいご支援、ご協力に對しまして厚く御礼申し上げます。新しい年が皆さまにとりまして実りの多い幸せな一年であることを心より祈念申し上げます。

創立百十周年を迎えて

本年（二〇一〇年）は、本学にとりまして、創立百十周年の記念すべき年になります。その記念事業として、「地域&グローバル」進一層」の百



十周年」を統一コンセプトに、順次諸行事を展開していきます。記念式典・祝賀会は創立記念日の十月二十三日（土）に国分寺キャンパスで開催します。これから行う予定の諸行事につきましては、皆さまにも本誌やホームページなどでお知らせします。

この百十年という長い歴史と伝統は、創立者、その時々々の学生や卒業生、そして在学生とその保護者、教職員、その他多くの関係者の皆さまの弛まぬ努力や貢献、寄せられる大きな期待をベースに営々と築かれてきたものです。少子化と国立大学の独立法人化を契機に激しくなった大学間の生き残り競争に勝ち抜くためには、百十年の誇るべき輝かしい歴史と伝統に甘えることなく、それを乗り越えて二十一世紀に輝く質の高い大学になるように、絶えることのない大胆な改革を進めることが焦眉の急です。

私立大学としての自治と自由な雰囲気は堅持しながらも、中央教育審議会答申に示されるような大学のあるべき姿についての社会からの諸提案や諸要請に速やかに対応することも不可避です。そのうえで、他大学との差別化を図るために、本学の独自性を発揮する諸施策を講じることが求められます。

教育の質の向上と活力に満ちたキャンパス

本学が迎え入れた学生の皆さんはそれぞれ無限の可能性を秘めています。この可能性を的確に見出し、それを最大限に引き伸ばし、自信と誇りを持つて、志高く社会へ羽ばたいていけるように、入学から卒業までのすべての段階で、きめ細かな配慮を行うことが、教育研究機関としての本学の最優先の責務です。

本学は、学生の皆さんが在学中に学年を追って大きく成長していることを自ら実感でき、卒業時には本学で学んで本当に良かったと胸を張っているように学習支援を行っています。勉学のみならず、課外活動や社会貢献などにも挑戦し、充実したキャンパスライフを送り、幅広い教養と実践的知力を身につけた活力ある学生の皆さんこそが二十一世紀のグローバル社会で活躍できる人材です。有為な人材を輩出することは、「東京経済大学は入学から卒業までしっかり教育している」という社会の信頼と評価を培い、就職力の強化、良質の志願者の確保にもつながります。このことが大学のブランド力を高めることにもなります。そのためには、専門教育、キャリア教育、教養教育のバランスを今後も重視した質の高い教育システ

ムを推進することが必要です。文武両道をモットーに、文化・体育会系サークルなど課外活動の一層の活性化を図り、キャンパスを活力に満ちたものにもしなければなりません。奨学金の充実をはじめとする学生支援制度の強化を図ることも必要です。学生の皆さんが充実したキャンパスライフを送れるよう、魅力あるキャンパス整備も進めていきます。

大学の使命としては、教育、研究、そして社会貢献があることはいままでもありません。それぞれの研究領域での最新の研究成果を吸収し、それを分かり易く学生たちに教えることのできる優秀な教員の確保、教育研究支援体制を充実することと同時に、国際社会、日本、地域社会等への様々な形での貢献や、卒業生の生涯教育等にも積極的に関わっていかねばなりません。

「TOKYO TOP30計画」

大学を取り巻く環境は極めて厳しいものがあります。現在本学は「改革推進本部」のもとで、教育改革や学生支援、キャンパス整備について改革案の策定やその推進に取り組んでいます。今後、前述したような「大学の使命」の達成にむけ、昨

年十月、「TOKYO TOP30計画」を掲げました。創立以来百十年にわたり、教育と研究を中心に培ってきた知的財産と、社会に輩出した十万人余の同窓ネットワークが織りなす「東経大ブランド」の再構築をなすとげるとともに、さまざまなステークホルダーの知恵を結集する形で私たちは、二十一世紀にふさわしい最高学府をめざしていきます。

昨年十二月、「日経BPコンサルティング」が「都三県の主要百二十大学（国立十二、公立三、私立百五）」を対象とした「大学ブランド・イメージ調査」結果を発表しました。それによりまず、首都圏の有職者に、各大学の学生に対するブランド・イメージを聞いたところ、「高い専門性、専門知識を有する」大学として、本学は、私立大学では十四位、全大学では二十五位に位置しています。本学は、研究はもとより、教育においては学生の教養と専門知識の育成とあらゆるチャレンジへの支援を通して学生の「人間力」を高めていき、首都圏におけるブランド、「総合力」で首都圏にある国公立大学計二百十九大学中、上位三十位以内に入ることをめざして、「質の高い大学」として発展を遂げたいと考えています。

大学にとっての同窓会は企業の顧客、自治体の住民とは性質を異にします。同窓会長は学校法人経営に携わる理事会理事を兼務するという点では内部者、構成員ではないが母校愛を持つ集団ということでは外部者でありながらファンクラブ会長でもあります。今、歴史ある大学ほど、同窓会会員の若返りと活性化が課題となっています。「魅力ある同窓会」とはなにかをテーマに、TAC「多摩アカデミックコンソーシアム」を組織する国際基督教大学（ICU）や津田塾大学など「お隣りさん」が取り組む同窓会活動を取り上げます。第一回目は在学生と大学との交流の舞台づくりと役員若返りによってパワーアップしたICU同窓会を取り上げます。

副会長を経て二〇〇二年に五十二歳でICU同窓会長に就任した斎藤一氏（写真）は「独立独歩で群れないのがICUの良さ」だと語る。在学当時の三倍に規模が大きくなり、大学の選定は、学業や自然環境に関する知名度や評判だけではなく、卒業生の進路や状況も含めてどれぐらい魅力的なコミュニケーションであるかを示すことが重要になってきた現実を知って、「群れない人たちが後輩たちや大学のことを考えて、取って魅力作りに関わってみるのも意義あること」と社長業で多忙を極めるにもかかわらず、会長就任を決意した。世界的なコンサルティング会社で人材育成を担当した経験を持つ斎藤氏が就任して最初に手がけたのは、同窓会のミッションを掲げること、それ



を実行するための組織改革である。ミッションはこうだ。同窓会は同窓生と大学と、そして在学生や将来の後輩たちにとって魅力的な組織になるように活動する——具体的には（1）限られた人だけの同窓会ではなく、広く同窓生同士が知り合える機会の提供（2）大学との意思疎通と募金活動推進（3）同窓生が在校生と直接触れ合う場の提供だ。

斎藤氏は「意思なく集まるのではなく、共通の目的に向かって行動すれば『群れたくない』と同窓会に背を向けていた人も寄ってくる」と実働部隊を組織化する。副会長に若い世代も加えて五人から七人に増員、七つの部（大学・財務・事業・組織・総務・広報・学生）に充てた。

岡野まかみ氏（写真）は斎藤氏より十七歳後輩で現在は女性誌副編集長として活躍している。在学当時、インターンシップで斎藤氏の手ほどきを受けた縁でこのとき急ぎよ、「広報部」に招集された。「仕事は死ぬほど多忙だったが、斎藤会長の心意気に大いに感化され」広報部に加わり、同窓会誌「ICU Alumni NEWS」を親しみ読みやすく一新。二期目では編集長を務めた。堅苦しくなりがちなトップインタビューでは素朴な疑問をぶつけ、母校に帰った気分になるようにと季節感あふれるキャンパススナップを多用した。年二回、二十四ページのカラフルなタブロイド紙である。編集作業を通じてマスコミ志望の学生を育てる就職支援の場ともなった。

「使命」から 「組織づくり」へ

「魅力ある同窓会」シリーズ CASE#01:ICU同窓会



同窓会長の任期は一期二年、斎藤氏は最長年限の慣例となっている二期四年務めた。この間、最も力を注いだのが在学生との交流で、各界で活躍する卒業生によるゲスト講義「AOLS」の支援や「ドリームコンペ（同窓会課外活動奨励賞）」を創設するなど、学生部を要としたさまざまな仕掛けを演出する。「AOLS」（アラムナイ・オープン・レクチャー・シリーズ）の狙いを斎藤氏は「成功者にも苦勞や失敗があるし、その話を聞くことで学生自身の能力や個性を最大限に高める機会になれば」と語る。また、総額百万円を支給する「ドリームコンペ」では書類審査だけでなく、学生たちに企画のプレゼンテーションの機会を与え、「見せ方」や「コメントの仕方」を伝授する場とするなど、五百人以上のコンサルタントを育てた人材育成のプロならではの着眼だ。

従来は秋に開催していた同窓会総会を三月に変えた。春、キャンパスの桜は美しく、「DAY賞」を受賞する卒業生が来校し、大学の栄光と貢献を同窓がひとつになって称えあう。Distinguished Alumni of the Year (DAY)賞は、ICUの知名度や魅力を高めた卒業生等を毎年、自他薦で同窓会が授賞する。二〇〇五年の創設以来、大学礼拝堂で同窓会総会後、表彰式を行う格調高い全学的なイベントとなっている。

斎藤氏のモットーのひとつは「類は友を呼ぶ。魅力的な人の周りには人が集まる」だ。斎藤氏の声かけて同窓会は既存の殻を破り、才能あふれるスタッフが結集し、組織を育て、元気にした。「自分を磨いて向上していないと人はついて来ない」、だから理事会でもイベントでも場の種類を問わず、魅力的な人を集め、「有名人には一肌ぬいでもらう」と語る。「魅力ある組織」は「人

決まる」と、豊富なネットワークを同窓会の飛躍のために惜しみなく活用した。ICU同窓会のホームページには斎藤氏と渡辺真理氏のインタビューシリーズ「今を輝く同窓生たち」が掲載され、ハーピストやタレント、医師、劇作家といった顔ぶれが並び、「群れることなく個性的に活躍する」ICU卒業生と大学の魅力を垣間見ることができる。斎藤氏退任後、会長はさらに「一回り」若返り、四十歳台が務める。

斎藤 一 (さいとう・けんいち) 氏 ICU卒業後、マツキンゼー・アンド・カンパニー入社。37歳でパートナーとなる。大前研一氏の下で、同社の人材育成を担当し、五百人以上のコンサルタントを養成。現在、フォアサイト・アンド・カンパニー代表。98年にICU同窓会副会長、02年から06年まで同会長・現在同窓会理事を務める。「問題解決の実学」（06年、ダイヤモンド社）、「実践！問題解決法」（03年、小学館 大前氏との共著）など著作多数。

岡野 麻架美 (おかの・まかみ) 氏 ICU卒業後、集英社入社。現在「BAILA」副編集長。



芥川賞作家も、本気で選びました。

高校生「わたしのエッセイ」コンテスト 2009

東京経済大学が全国の高校生に向けて、思いをつづったエッセイを募集するコンテストの入賞作品が決まり、昨年十一月二十一日（土）、表彰式を開催しました。

エッセイのタイトルは自由で千二百字から千六百字、「いまだき」の十代後半の人生をつづった作品が北海道から沖縄県まで、百二十四高校の合わせて千四百八十一作品が寄せられました。三年目の今年度の本選考は、二十の候補作品のなかから、選考委員を務める芥川賞作家の大岡玲（おおおか・あきら）東京経済大学教授と、日本古代文学研究の兼岡理恵（かねおか・りえ）同専任講師、博報堂生活総合研究所のエグゼクティブフェローで顧問の関沢英彦（せきざわ・ひでひこ）同教授が大賞1編、佳作3編、最も応募数の多かった高校に対して贈る学校賞を決定しました。

受賞作（敬称略）

大賞…「てーつなごー」 仁科 亮太

山梨県北杜市立甲陵高等学校一年

佳作…「私って目千両？」 赤柴 友梨

東京都・私立学習院女子高等学校三年

佳作…「変わりゆく社会」 富坂 佳澄

北海道・私立函館白百合学園高等学校二年

学校賞…東京都・私立学習院女子高等学校

選考委員特別賞…該当作品なし



大賞「てー つなご！」
山梨県北杜市立甲陵高等学校1年
仁科 亮太さん

ぼくたちは、いつから手をつながなくなるんだろ。いつからお互いに距離をおきたがるようになるのだろう。と、ふと考えた。先週の保育園での職場体験のときに。

ぼくは昔から人と手をつながることが好きだ。相手をとんでも感じられるし、優しい気持ちになれる。それに、勇気もわいてくる。昔お化け屋敷に行ったときは親と、あるときお風呂が停電しちゃったときは妹と、ぼくは手をつないでいた。暗くて怖かったけど、すごく安心感があった。

寝るときも、小学校のかなりの高学年までお母さんと手をつないでいた。

動物とだってする。よく、犬と一緒に手を重ねて横になって寝ていた。すごく気持ちいい。犬もきっとそう感じてくれていたはず。

好きな子とも、手をつなげるだけで幸せだった。体温が体を超えて行き来し合うというのも、考えてみればロマンチックだなと思う。

今でもぼくが手をつなぐのがすごく好きでいられるのは、手をつなぐ習慣が強かったことが大きいのかも知れない。

なぜ、保育園でそんなことを考えたかというところ、子どもたちがぼくに「てー つなご！」と口ぐちに言ってきたから。長らく人と手をつなぐなんてことがなかったから、とても嬉しかった。手をつないでだけで、仲良くなれた気がする。子どもたちは、手をつなぐだけじゃなく抱きついたりもしたり、誰もが「接する」ことが大好きだった。

少なくとも中学校に入ってから、ぼくは友達と手をつなげた覚えがない。試してみたものの、拒まれてばかりだ。中一のときに一緒にホテルに泊まった友人を「てー つなご！寝ようぜっ！」と必死に追いかけた。今となってはすまなかったと感ずる。相手がつなぐ気がないのだったら本末転倒だった。この前も、友達の肩に腕をまわしてみたら、やはりあやしまれただけだった。

みんな、大きくなると相手と一歩距離をおくようになる。なんでだろう？と思ひ、想像してみる。

ことになった。「恥ずかしいから」とか「暑苦しいから」とか思いついてみたけどどれもしっくりこなくて、すると、「なんとなくそうしたほうがいい雰囲気だから」という結論になった。

大人がそうしているから、「それが大人らしいことなんだ」と思いこんでしまうのだと思う。つまり、まわりの人がみんな手をつないでいたら、誰だってそうする気がする。というの、例えば欧米とかでは日本よりはずっと挨拶でキスしたり抱き合ったりするわけで、結局は社会の風習や事情に従っているだけだからだ。機械的に。子どもがなぜ手をつなげるかというと、そういう思想がまだ流れ込んでいないからだろう。

大人も「恋人」という関係では手をつなぐ。それはもしかして、手をつなげなくなると実はさびしくなった大人たちが「自分の一番大切な人とだけは手をつないでいい」という特別ルールをつくった結果ではないか。そして、それがさらに「誰とでも手をつなぐ」ことを難しくすることになる。誤解を招き易くするからだ。例えば、男同士で手をつないで歩いているとそれは「親友」関係ではなく「恋人」関係だとみなされるようになる。ぼくはそんな誤解なんぞむしろラッキーなのだが、大多数の人は面目を傷つけたくないと思うだろう。人間社会に生きていくのだから、ぼくだって周りの影響を受けてしまう。「歩く人みんなが手をつないでいる街」、というものを想像してみると、やはり最初「うわーなんだかなー」と思ってしまう。でも、それはこの流れの中で植えつけられた思想であって、本当は、そんな場所へ行ってみたいと思っっているはず。だってすごく素敵だ。みんながつながっている。

手をつなぐのは子どもだけの特権なのだろうか。大人には似合わないものなのだろうか。「みんな、子どもみたいに手をつなごうよ」と言いたくなってしまう。

今日も大人たちは自分に壁を張り続ける。人の温もりを感じたいぼくは、明日もまた保育園に遊びに行くことにした。

芥川賞作家に見てもらおう！
高校生「わたしのエッセイ」
コンテスト 2009



キャンパスECO!シリーズ

「かんきょう博2009 in 小金井+国分寺」

東京経済大学で開催

東京経済大学教授 除本理史 (よけもと・まさふみ)



展示の様子



シンポジウム「国分寺+小金井を元気にする提案!」

開催までの経緯

筆者も会員になっている「小金井市環境市民会議」(小金井市環境基本条例にもとづき、市民が二〇〇四年に設立)は、毎年、「かんきょう博覧会」というイベントを開催している。これまでは小金井市が共催し、市内の大学を会場に実施されてきた(二〇〇七年は法政大学工学部、二〇〇八年は東京学芸大学)。

今回は「東京経済大学を会場に」という要請があり、一年近い準備期間を経て、十一月十四日、十五日の両日に、何とか開催することができた。本学は、国分寺市と小金井市の境にあるが、所在地としては国分寺市である。そのため、これまでの「かんきょう博覧会」のように、小金井市のイベントとしてはではなく、両市を巻き込んだイベントとして計画した。紆余曲折はあったが、最終的に国分寺市サイドからも、市が協賛に加わってくたさ(本学も協賛)、市民レベルでは「国分寺市環境ひろば」が協力という形で関与してくださることになった。結果的に、イベント名も「かんきょう博2009 in 小金井+国分寺」とすることになった。初日の開会式では、小金井市の稲葉孝彦市長、国分寺市の星野信夫市長とともに、本学からは久木田重和学長が挨拶を行った。

ポスター展示と「かんきょうリサイクル市」

「かんきょう博覧会」は、展示、映画上映、カフェ、子ども向け企画など、盛りだくさんの内容だが、今回、筆者のゼミでも複数の企画を運営または参加したので、以下に紹介したい(なお、これ以外に、経済学部の尾崎寛直准教授のゼミでは、障害者団体のつくったお菓子などによる「コラボカフェC.A.S.I.S」を運営した)。

一つは、二〇〇九年度の筆者のゼミのテーマである「地産地消」に関する研究発表(ポスター展示等)である。学生が四つの班に分かれ、小金井の地域農業や、地場野菜を提供しているレストラン、国内のワイナリーなどに足を運び、聞き取り調査等をもとに展示を行った。また、「かんきょうリサイクル市」と名付けたフリーマーケットを併設し、ゼミ生だけでなく筆者も加わって、衣類やバッグなどの様々な物品を持ち寄り、それなりの売り上げをあげた。

「環境」の視点から地域活性化の施策を提案

もう一つは、二日目の午後に行われたシンポジウム「国分寺+小金井を元気にする提案!」である。筆者のゼミの学生が、国分寺と小金井の二つのグループに分かれ、市役所等での聞き取り調査を行い、あるいはまちを歩きながら、「環境」の視点から地域活性化の具体的な方策を考え、提案した。例えば、国分寺グループからは、引き取り手のない放置自転車を無料で貸し出し、市内の移動の利便性を高めて、史跡などをめぐってもらおう、といった提案がなされた。両市からのゲストコメンテーターは、小金井市商工会長の村越政雄さんほか五名で、本学からは青木亮教授、尾崎寛直准教授、福士正博教授と筆者も参加して熱心な議論を行った。シンポジウム終了後に、主催団体の事務局の方からは、学生の発表に対して、「今回限り」とするのはなく、今後とも地域での取り組みを継続してほしいという希望も出された。

二〇〇九年の「かんきょう博覧会」は、両日で参加者が延べ四百名にのぼった。今回のイベントが、地域における本学の存在感をよりいっそう高めていくうえで、一つの契機となることを願っている。

2007年4月からスタートし、全学をあげてやる気のある学生を教育的・経済的に支援する教育システム「TKUアドバンスプログラム」の履修生から、最難関といわれる国家資格に在学中に合格する学生が誕生しています。

法プロフェッショナルプログラムから「司法書士」

現代法学部の学生を主に対象とする法律専門職やロースクール、企業法務などを志望するコース「法プロフェッショナルプログラム」（定員20人）の第1期生の高田啓（たかだ・けい）さん（現代法学部4年）が昨秋、総受験者2万7千人で合格率は2パーセント台の狭き門であった司法書士試験に現役突破を果たしました。高田さんは2年前には法学検定試験で全国第3位に輝く実力者でした。このうち大学在学中の合格者は0.1パーセント程度です。「司法書士」は、不動産登記や成年後見業務などを担当する専門職で、身近に起こる問題の駆け込み寺のような存在として人気が高まっており、年々、受験者が増えて難易度がアップしています。

高田さんは「一人暮らしなので週1回の予備校の講義前日に早く寝るのが大変」と振り返りながら、「勉強を楽しもうと決めて実践できたことが早期合格に結びついたと思う」と語っています。

キャリア・サポートコースで「公認会計士」

「TKUアドバンスプログラム」の履修ではなかったものの、昨年11月、富澤哲大（とみざわ・てつひろ）さん（経営学部4年）が、東京経済大学が専門学校との提携によって資格試験対策講座を割引料金で学内外で受講できる「キャリア・サポートコース」の活用によって、公認会計士試験を突破しています。公認会計士試験の現役合格は前年の小林由佳（こばやし・ゆか）さん（2009年経営卒）さんに次いで2年連続のことになります。

さらに・・・

今年度、新司法試験合格者も卒業生から誕生しました。94年に経済学部卒業後、金融機関勤務を経て、北海道大学法科大学院（既修者課程）で勉学に励んだ鈴木史浩（すずき・ふみひろ）さんです。

TKUチャレンジシステム
「TKUアドバンスプログラム」
司法書士、公認会計士試験を突破！
特進的な本学独自の教育システムが実績



高田啓さん



新図書館メディアタワー（完成予想図）北東角からの眺め



新5号館（完成予想図）南西角からの眺め

未来キャンパス！ 計画進行中！

キャンパス再開発、いよいよスタート
「国分寺キャンパス

建設整備マスタープラン」

キャンパスは、学生が四年間を過ごす大切な舞台です。われわれのめざそうとする「TOKYO TOP30計画」にふさわしい、魅力ある大学作りには、教育研究の多様化・国際化やICT技術の進歩に先駆けての教学改革が不可欠ですが、こうした施策をしっかりと支え、創立百十周年という伝統に恥じない、他大学に負けないキャンパス環境や施設設備の整備も重要です。それ故に、本学は、国分寺キャンパス建設整備マスタープラン策定に取り組んできました。

国分寺市は先年、国分寺崖線の自然環境を守るための「まちづくり条例」を制定し、国分寺キャンパス全域が、建物の高さは十五メートル（特例として二十メートル）以内という規制地域に入りました。そのために、マスタープランでは、キャンパスの北半分に建物をバランスよく配置し、可能な限り緑地を保存する計画としました。

このマスタープランに従って、今後五〜六年をめどとした第一期建設整備計画をとりまとめ、国分寺市に提出しました。昨夏、その計画が「国分寺市まちづくり市民会議」で審

議され、環境に特段の配慮をすることを条件に、建物の高さの特例が承認されたので、その後学内で、新5号館・新図書館の基本設計の検討を進め、昨年十一月に、学長に両棟の基本設計の答申を行いました。その概略を以下に示します。

●第一期建設整備計画

- ①一〇〇周年記念館前の空き地に、三百五十人規模の教室二室からなる仮設校舎を建設する。
- ②その後、五号館を解体し、その跡地に地下一階、地上四階建ての教室棟（仮称新五号館）を建設する。
- ③三号館の施設を新五号館に移し、三号館を解体する。その跡地に地下一階、地上四階建ての新図書館を建設する。地下一階から三階までを図書館とし、四階の大部分には個人研究室を設ける。
- ④図書館機能を新図書館に移した後、現図書館の内部を改修してその他の需要を吸収し、その後仮設校舎を解体する。

第一期建設整備計画は、キャンパス内で、通常通りに授業や定期試験、入試、募祭その他学生活動等を実施しながら進めなければなりません。そのために、仮設校舎の建設開始が今春、新五号館の竣工が再来年二月、供用開始が同年四月、新図書館の竣工が二〇一三年十二月、現図書館の改修が二〇一四年九月と、足かけ五年にわたるものとなります。制約が厳しいだけに、かなりの時間と費用がかかりますが、完成した晩には、メインストリートや広場を備えたキャンパスに一新されます。ご期待下さい。

復刻版刊行!

大倉高商新聞～ 東京経済大学新聞

このたび、「東京経済大学創立110周年」ならびに「葵友会（同窓会）創立100周年」を記念し、前身の大倉高等商業学校時代に創刊された学生新聞「大倉高商新聞」の創刊号から「東京経済大学新聞」1978年1月までの50年分を縮刷版にて復刻出版いたします。激動の日本近現代史における学園内外の動きを敏感に捉え報道しつづけた学生新聞は、大学の歴史を克明に記録し、また在校当時の様子を伝える唯一の文献として貴重な史料です。

この機会に、是非お手元にお揃えいただけますようご案内いたします。

概要

全5巻・別冊1（A3判・上製本・函入り・総1,506ページ）

別冊 解説（橋谷 弘 本学教授）・総目次・索引

創刊 1928（昭和3）年4月15日より
1978（昭和53）年1月17日号までの50年分を合本復刻。

価格 各巻・別冊1 20,000円＋税
全5巻・別冊1 揃価格 100,000円＋税

- 【第1巻】1928年 4月15日～1935年2月までを収録 ▶「大倉高商新聞」
- 【第2巻】1935年 4月 ～1944年4月までを収録 ▶「大倉高商新聞」「大倉高商学報」
- 【第3巻】1946年12月 ～1959年3月までを収録 ▶「大倉経専学報」「大倉高商新聞」「東京経済大学新聞」
- 【第4巻】1959年 4月 ～1968年3月までを収録 ▶「東京経済大学新聞」
- 【第5巻】1968年 4月 ～1978年1月までを収録 ▶「東京経済大学新聞」

卒業生および在校生は **特別価格**
各巻 10,000円（税・送料込み）
揃価格 50,000円（税・送料込み）

お申込み方法

ご予約・お申し込みは、専用の「注文申込書」にて承ります
（書店では特別価格での取扱いいたしません。）
刊行は2010年2月を予定しております。
ご予約の方々へは出版元の不二出版より、宅配便の代金引換
払いでお届けします。

お問合せ先

東京経済大学 秘書課史料室「学生新聞復刻版申込み」係 電話 042-328-7955 まで

創立百十周年を機に、 学生新聞がよみがえる!

学生新聞復刻の意義

東京経済大学教授・経済学部長 橋谷 弘

本学の学生新聞は、前身である大倉高等商業学校の「大倉高商新聞」が創刊された一九二八年四月から発行が始まりました。途中、「大倉高商学報」「大倉経専学報」と紙名を変えて大学の広報紙としての性格が加味されたり、戦時体制下で記事内容に制約が加えられたりした時代もありました。そして一九四九年四月に新制大学に改組されたのを機に、「東京経済大学新聞」となって現在まで続いていますが、今回は創刊から五十年たった一九七八年一月までが復刻されています。この復刻版には、本学所蔵の学生新聞だけでなく、学外も含めて所在が確認できるすべての号が所収されています。そして、大学内外の動きを伝える高い水準の記事のほか、学外の寄稿者の論説や広告の中にも、それぞれの時代相が映し出されて大変興味深い内容となっています。

本学の歴史だけでなく、戦時期をさまざまな激動の日本近現代史を知ることのできる貴重な史料として大きな意義を持つといえるでしょう。

左ページをご参照になり、購入をご希望される方は同封のがきでお申し込みください。

寄付者御芳名

東京経済大学には、さまざまな使途を目的とした寄付金があり、日頃よりご父母の皆さまをはじめ多くの方々のご協力をいただいております。ここに寄付を賜りました方々の御芳名を掲載し、深甚の謝意を表します。ご厚志は教育の充実や奨学金制度の拡充など、本学の発展のため有効に活用させていただきます。今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2010年1月

学校法人東京経済大学 理事長 村上勝彦
東京経済大学 学長 久木田重和

個人情報保護のためWEB掲載は控えさせていただきます。

山田川?

この大学、父が薦める、 母が薦める。なぜかな。

東経大(TKU)の就職方程式

自分力+TKU 教育力+TKU 先輩力=TKU 就職力

不況の中で、大人はキビシイ。

大学、卒業したら、私たちがヒトゴトじゃない。

就職、がんばれる大学に入らないと、ね。

親が東経大を薦めるのも、だから、かな。

東経大の場合、「全国55の地域支部」

「金融、流通、マスコミなど

の就職支援組織」「20を

超える職域支部」など、

先輩たちが就職に向けて

バックアップします。

東京経済大学

経済学部・経営学部・コミュニケーション学部・現代法学部・21世紀教養プログラム JR中央線「国分寺駅」下車、徒歩13分



JR東京駅 八重洲口(北口) 2009年9月3日から掲出